災害派遣活動を通して感じたこと

被災地を見て感じたこと

・同じ市の中でも地区により被災の状況が違い、道の反対側と比べても違う箇所があった

・輪島市、珠洲市に足を運んでみて、肌で感じる被災状況はかなり悲惨であった。１階部分が潰れた家屋、火災で焼失した家屋の残骸、火災の熱で溶けてしまった雨どい＆ポリカーボネートの板、かなりショッキングで思い出すだけでも気分が沈んでしまう。私個人は道路などの被災状況は写真に収めることができたが、倒壊した家屋などは写真をとることができなかった。

・同じ市内でも被災状況が異なり、日常と非日常が混在している状況だった。道を挟んだ向かいの家は倒壊し住むこともできない一方で、普通に住める家もあることに驚いた。

活動業務について感じたこと

・各自治体単独での災害派遣はかえって業務の混乱を招くのではと感じた
（完結型の支援ならば別だが）

・給水車１台では町内複数の断水には到底対応出来ない

・検討が進められているが、井戸水や湧水等の把握は必要

・公民館や常会などに、１トンの給水タンクを１基ずつ配備できるだけで、かなり給水の効率がよくなると思う。

・市民給水において多くの被災者が給水所に来られたが、単に飲用水を求めに来られるという顕在的なニーズの裏にある「誰かと話をしたい。」「話を聞いてほしい」という潜在的なニーズもあるように感じた。

・うまく助けられる準備は、自治体、区や常会等の地縁組織、医療・福祉等の施設、個人それぞれのレイヤーで必要なことだと感じた。市民給水では、満水にしてしまうと持てないため、給水タンクに「ここまで」の線が書いてあったり、ペットボトルのキャップを外して給水を待っていたりと、助けられ上手が増えていく様子が見られた。

・人は助けを求めることが苦手であると感じた。「我慢強い」「辛抱強い」というイメージは、単に助けられ下手という側面もあるのではないか。

・供給側の効率の良さは需要側の準備次第で大きく変わる。いつでも助け（支援）を受けられる準備や想定をしておくのも訓練だと感じた。

その他

・災害を目の当たりにして、自分の無力さを感じた。

・大規模な災害、殊に震災があるごとに建築基準法の改正などハードに関することや、ボランティアのあり方、地域の絆など日本は様々な教訓を得てきた。今回の震災では道路や水道・下水道などインフラに注目が集まったのではないかと感じる。